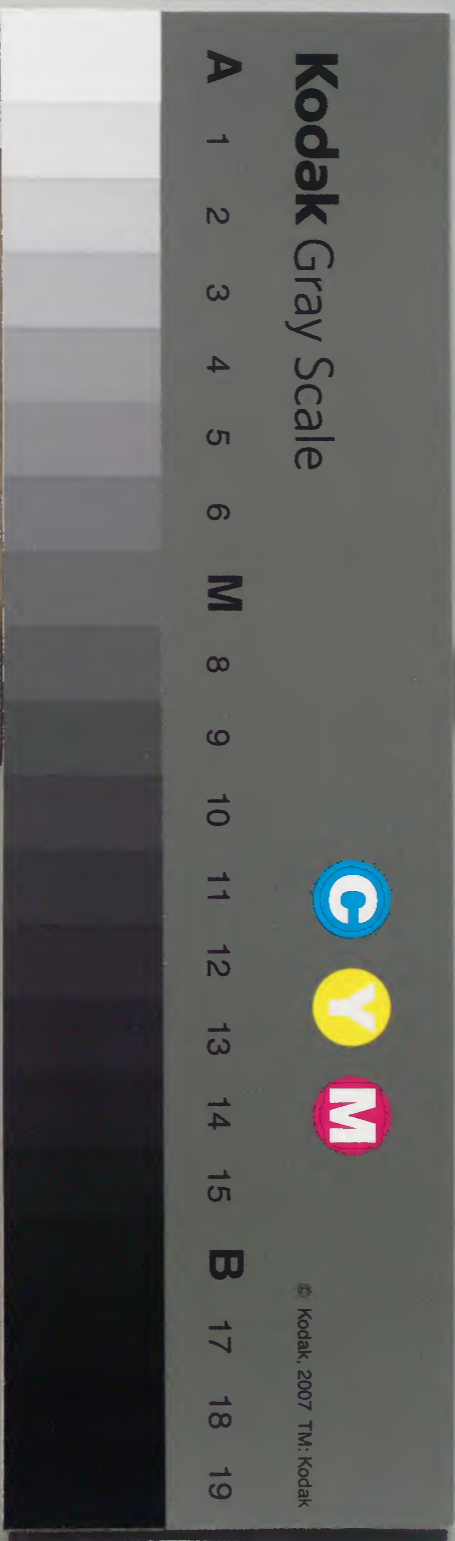


寛永諸家譜

藤原氏丙十冊之内一
秀郷流

| | |
|------|----------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 20199 |
| 冊數 | 186(87) |
| 函號 | 76 1 |





錦鴻

近藤

寛永諸家系圖傳

藤原氏

丙一水家

秀郷流

錦鴻

しづめのる新造寺中村とのら
錦鴻とあり

大織冠氏

魚名

江邊たたら

浅草文庫

藤成 ふじなり

冬議 ふゆぎ

豊澤 とよさわ

下野少掾 しもねのせうげん

村雄 むらたけ

下野の掾

秀郷 ひでさと

依藤右 隼守府掾 よすだ えいも のりえん

千常 ちね

隼守府將軍

文脩 ぶんしゅう

隼守府掾

文行 ぶんぎょう

左衛門尉

母名 利仁將軍の女 りじん せいじん の め

云光 うんこう

相模守

云清 うんせい

伊豆守

季清 きせい

左衛門尉

後五位

● 季益 とくまさ

龍造寺 りゅうぞうじ

宿阿 しゆくあ

安秀 やすひで

榮秀 さかひで

家氏 いえうぢ

胤家 いんけ

龍造寺豊前守 りゅうぞうじぶぜんのかみ

法名定三郎 ほつなまじやうざぶろう

家兼 いえかね

山城守 やましろのかみ

法名剛忠 ほつなまごうちゆう

胤家乃三男家督とけいぐ いんけのさんなんけかくとけいぐ

家純 いえじゆん

豊後守 ぶんごのかみ

法名鑑藏 ほつなまかんざう

嫡女

鍋橋河守清房が妻

法名華溪

家門

和泉守

家純が養子也なれ美ら家純が弟也
法名素雲

周家

六高次郎

家門の養子と称ふ美ら家純が子あり
早世 法名鼎伯

隆信

山城守

隆信牧度の戦場より出張し大に
勝利を得くろれ名を九割りし
しん

汲家

母を家通が兄家負が子流尚がじとめ
なり同家の子せし華漢死すの候
隆信が母も〜び端端清居よ
嫁と

享正十二年三月二十四日五十六歳
て卒と 法名泰教

民部左補 位下 侍従

出茂

享長十二年十月二日五十二歳
卒と 法名大雲

位下 和賀守

出家の事母子と好み実を疎けし法名子
太宰少貳の家なり

永禄十二年三月二十四日
國皇女友宗麟との配元二人を〜

千九百騎を引く肥前此島津侯と其子
並茂しむじつみせささうの勝利
を得たり

元龜元年四月二十三日宗廟大軍と

おしつ流後の國高良山り本張と其

先陣おしく肥前のお神崎郡婦村

と討られ

と討られ

同年大友節大共を引もく

より肥前のお城郡入りしり今山
陣を引八月廿日おけお此並茂
二の餘騎を引もく大友の陣を破
りこれをお少里八郎を討つは
九州のりおあく教とら軍を
おかり城を引し事二十度り
或は自劔戦とら剛教とら
首とら事おけくおとら
並茂と病を引もく

延治十一年秋造寺改家病氣よより
て家督と直茂り移つた

文禄年中渡海一朝鮮入り入ふく
とくみく威鏡道吉別りつひく

教方の今我りらりともなうらじ
歌をわが事おひ

享長二年冬尾秀吉薨去れり
ゆく直茂朝鮮よりつひくは井伊
兵部右衛門直茂とつひく直茂寺長光元佑

をまひく

東照大権現りつひくつひくつひく
の首と云ふとま

大権現清座と云ふ病のつひく
つひく伏見の城り清座をうらむ
らまん事といふあまうくまらる此り
つひくつひくつひく威あり

同四年

大権現伏見り清座のつひく信長軍

阿ふりうくし方志づる

ふれと

右法院殿乃法巻取

崇源院殿乃 皇伏乃おけり

大権現より柳原式部左補原政と

使やしくもそに 巻取のこみ

巻取巻取を巻取の巻取りうは

巻取巻取の巻取りうは調護

巻取巻取の巻取りうは

巻取巻取の巻取りうは

巻取巻取の巻取りうは

大権現の巻取をうは

巻取巻取の巻取りうは

巻取巻取の巻取りうは

巻取巻取

大権現まきうは

巻取巻取の巻取りうは

巻取巻取の巻取りうは

元和四年六月三日八十一歳一く
卒しと 法名日峰ひつみね

高房たかふら

延和位下 新造寺跋しんぞう河守かわもり
重茂むねしげの養子やしよとするとす美ら政家みらけの三男さんなん
なり

延和十二年九月六日二十二歳一く
卒しと 法名天祐あまのたすけ

勝茂かつしげ

延和位下 信濃守しんのうもり

延和元年 兵を引ひく物もの鮮あまり
い子いこ父ちち重茂むねしげとすに武切ぶきりとすとする
ひ捕利とらをひひたり

同三年どうさんより歸朝きせうなり

大権現おほごんげん長ちやう阿由勝あゆかつの長盛ちやうせいが女むすめをとりな

い勝茂かつしげのあに嫁娶けあひの礼らいあり

寛永三年かんえいさん八月二十七日はつげふにじゅうしちにち延和位下えんわいげより

叙一侍返り伊豆

同十四年此冬来る志了ん宗門の
族肥前の國馬入りおひく一揆を
おろし原の城に指移のるに播磨上
より入りおろく諸將もおおしく馬
りよりひこ同十四年二月二十方
勝茂結軍入りおろく一萬に攻入
城中におろしひ聖二十八日一揆のぬ
原よりおろく誅戮し城をおろく

元茂

紀伊守

元和五年十二月晦の辰五位下り叙長
寛永十四年播茂也おろしく馬
りおろく

壺宗

死守

忠直

肥前守

早世

母長部内膳正長盛のむすめ

元和元年十二月二十六日辰位下

叙

右近衛院法諱の字ありては乃

稱号とあり

直澄

甲斐守

母とあり

茂継

形部左衛門

母とあり

寛永十七年十二月二十九日辰位

下り叙

女子

女子

上うへ秋あき彈たま正ただ少すく彌や定じやう勝しやうがが妻つまとと好このりり早はや世よ
母ははととりりおおるる

杉すぎ平へいににまま面めん以も忠ちゆう房ぶうのの妻つま 母ははととりりおおるる

某

箱はこ奴ぬ

母ははととりり杉すぎ平へい下げ総そう守しゆ清せい匠しやうののじじととああ

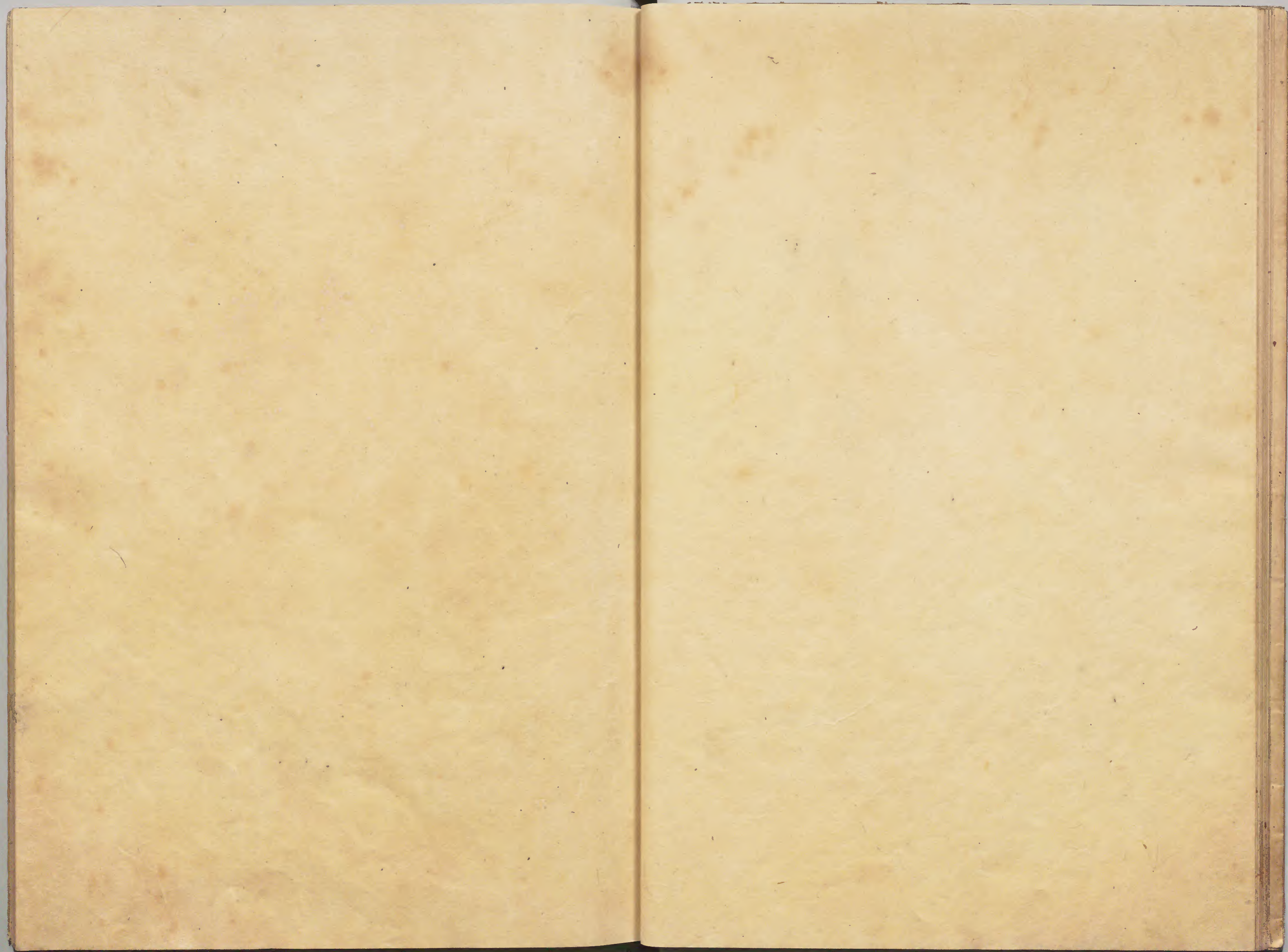
家いへ紋もん

若わ荷が丸まる

新にい造ぞう寺てら

家いへ紋もん

日ひ小こ日ひ足あし



●直満ちかみち

近藤えんどう

元祖もとすと名取なとりの五八ごはち名郡なぐん宇利うり在の
任人にんなり

参判さんはん宇利うり在の任人にん

注しゆ一いつて為な業ごうと号ごう也

享徳二年十一月二十一日じやうとくにふたにねんじゅういちがつにじゅういちにちに死しす

此阿比ご中終

満用

天文十年五月二十一日より終
法名還阿

忠用

勘助 のら固防守と号と
と心六年五月一日より終
法名一安

康用

勘助 石見守 生國冬河
宇利の城より任也
永禄十一年冬河の終とく
東照大権現より輝服とこいごま妻判
まご康をいあまよりりて菅沼
次郎右衛門尉本三郎左衛門尉は康用
清味と和り忠義とわさんでい勅賞
を阿くともあはつこのひの御判の

御誓書と申すはこれと案すいしく
今度あ三人の此走井若筋幸あり
下おれし旨本中道終之りく出盡
知り分く事永云お遠為不入扶持
早若は甲州彼知り分る様く彼
中極く左進退すし趣見致しる案也
御誓書不度申す

誓詞これあり

永禄十一年十二月十二日家康御判

菅沼次郎右衛門左
衛門守辰
右衛門守辰

今度幸州へ付る事ありあ三人の志
節井若筋合案内下り出く由藏
候しと申す上は此等対申す知
りし事

- 一 井若筋藏新知不知一各が事
- 一 二僕左衛門右藏一各が事 但是五百

費文事

一言園者子方事 一言利本

一氣契つ 一かんゆのり 一まんごく橋つる

一山田 一川合 一わやじ

一五領 一野色 一かんさう

一あんま 一人見并 新橋小沢渡

者彼中付く分伊成爲不入お遠水

為新飲出並取也并於此地田原三百

費文下出並也并若飲く分お付

内戴子費文何を替地可出並也為後
甲別る移くら申事は此以起請文
P定とる進退掛く之P理おあ
お並也、もと領何方成は河換く忠
先判取切並は於此と者おあも
お並也の岸

十二月十二日 家康御在判

三官沼決命右兼つる

近者石見守殿

御本三郎大進

菅沼新八郎右の御判。御書とお記。

と云ふ事なり

今度井谷調儀迄廻り候事

控の控を右回し候事候納百性

此云お遠く候に被申候相違

類父郷五拾貫候とお添進書也

此と意向候別無沙等果前候事

趣意は、其下合の今度長崎

よりらおの知り方候候事

おの拙者御人、事の上も慮云

おのる事ト

御文お達候事

永禄十一年 菅沼新八郎

拾月十二日 定盈

新八郎家老 今泉守兵衛

延傳

近海石乃る後
銘本ら高き其後

右く外石見守康用知の分書付

- 一 宇利村
- 一 下宇利村
- 一 吉川村
- 一 馬田村
- 一 度々村
- 一 津守村
- 一 小波田村
- 一 幸葉田村

合貳百貳拾壹貫文

大指現是傍りりせはりませり一町幸別

沙征伐ある一このし祇康用り

作つけくあるものした康用春別宇利

の城を由るよりよりてまづ是男秀用

なすく回ふ山野を田一ころはくひ

遠別井谷とら山川道路の案内と

祇んがらり刀をきりそのくらし菅沼

銘本ありびは康用ありやともしりて

大指現よりと一そまきまつりすふしら

案内とすせりりいまは三年なり

さびり孝則帰服とあまより刑部
堀江溪松の三乃城これ 慶下は属と
うれらあはあすけ三人をさしと
先也と一をゆらうれら甲州の共
まよりて宇判の城をかこむとさ康用
小勢とさつと強敵を逃らし徳利
をゆく制をわらふ
大権現清感のあまりに 清感状を下し
う海よこれ乃とたぐりおわく

あじくそつひゆへりおわく病をわ
かりくり歩らふと
孝則帰服のら武田信玄を押しあ
菅沼於本たりびり康用と
孝則山野を向りてをさし人
とさと井若れ三人をさし
とさ十六年三月十二日をあ井若
おわく七十二歳とく死と 法名
全切

秀用

勘助 登助 平右衛門 のら石見守と号

長谷川忠清よりうまれを別井と号

位と

永禄十二年幸別堀江の城をせり

と此秀用甲冑を著せんとて鎧を

あしを城戸のうらよとていふ名

元龜三年三方原合戦乃ら信玄に

刑部より越年一山縣と即ち衆と

井平村より越年一山縣と即ち衆と

家人長瀬と衆と打撃く在

あり力と打撃くありとあり

歎六人うらと山縣これをうら

て罪を百姓より捕とありとあり

用夫文を討く秀用これをうら

をけ

享正三年長篠合戦の母泊井在村

諸兵とてつゝ鴨巣をせし秀用素内
者ゆかりてしむせじひ政とてしり
同十年を別取方原乃城よりおわく
武田勝頼をせめしゆりしとて秀用
大指現乃津馬のよまふありて一番のま
を別横次和馬とて神の城を攻めし
とて秀用首七級をうらとせ
同七年勝頼駿河田中此城よりしり
とて

大指現これを征伐ししゆりし
秀用久多此指つゝありしとて
同十年信州乙事退陣の時秀用
麾下小属ししとてしりし
しむせじひ郎はむりく敵兵とて捕
同十一年江州小谷合戦乃時名
同十二年長久多合戦の時
をりしゆりしとて井伊兵部が指
とて秀用とありしゆりしとて
とて

を追おりひ大おり勝か事じと得とり

同十じ年小こ田た原はら陣ぢんのの死しも又また変へ改かす

原はらと変へ改か三さん王わう藤とう曲きよく痛いたを改かとと奔ほん

とと長なが秀ひ用うひひううにに郭かく内ないととううひひ

乃なととくく変へ改かりりははぐぐこれこれよりよりいいと

変へ改か事じ少せう少せうととくく宗そうとと水みづ

同十じ九年奥おく別べつ九く部ぶ一いつ揆けいのの死し也や

変へ改かりり原はら一いつでで後こう向かうとと款けん城じやう中ちゆうととわ

鋒ほうををつつささいいごご一いつ婦ふせせささいいごごのの秀しゆ用う

変へ改かすすげげくくいいくく我われりりじじううひひてて款けん乃なり

鋒ほうををううごごひひららねね一いつとと秀しゆ用う城じやう戸こ

口くちりりじじううひひくく鋒ほうををううごごよよ変へ改か乃なりととくく

これこれをを志しれれ可可

同十じ九年九年元げん和わ元げん子し大だい坂さか友ゆう度た乃なり

清せい陣ぢんりり足あし種むねののものものののみみ十じゅう人にんをを斃あり

中ちゆう旗き下かりり死しす

寛かん永えい元げん年ねん相さう別べつ小こ田た原はらのの城じやう為ためとと勅てつ

同二どうに年ねん二に月げつ十じゅう日にちにに五ご位い下かりり叙しよせせとと進しん

同二どうに年ねん二に月げつ十じゅう日にちにに五ご位い下かりり叙しよせせとと進しん

石見守り伊豆いしみのりいづ

同八年二月六日ハ十五歳いして卒しゆと
法名清不はうにん

用忠もち

小十郎のら八歳ちと号なと
春別守利はるべしりりうまは
天正十二年てんていじふにねん長久ちかくも合我あはれの時とき
首級しゆけいといり
元和元年四月廿日げんわげんねんしがつにじふにちお別べつよおわわと

一
五十二歳いそ法名浄光じやうくわう

用尹もち

小十郎せうじうらう 生國なまくにお換か
春別はるべし井岩いゐお別べつ中郡なかつぐん乃なりううららよよ
おわわくく五い十じ三さん十じゆ石いしのの末すえ地ちとと終はりり

用政もち

小六せうろく金丸かねまるののらら幼お右みぎ丸まる也や号なと
小田原陣せうでんげん乃なりととささ見み考かう用もちととああひひ

とも小妻政の居る二王藤曲端と政
少の敵城戸より鐘とつづり
そこのみよこれに用政の鐘と
びとり二ヶ不病とつづりそのら
前田孫四郎の居る使番とつづり
る長五年加別大正寺合戦の時
城中へのり入思母衣けつる武者と
鐘を何せ言ふをゆつり志のな
らず城中はくくもへつれりあを

うらみとりて敵を討らる孫四郎
新収一國状をさづけそのつづ
り地と加倍と
大坂あや乃侍陣
上津院殿の借布一侍使番とつづり
寛永二年七月七日は戸よりあひく
死と歳五十八 法名宗志

用清

劫七郎 劫右馬 武列いり伊戸いどのま

寛永十六年五月朔日 浄安じやうあんの氏

中形なかがた

用弘

傳九郎

季用

劫物のかりまけのら 壹物いっぶつと号なづは 季列きり漢名かんめい

りうま生うま進しん井いのや岩いわ若わかれら金かね指さしりら何なにとと小こ田た原はら

陣じんののとと比ひ文ぶん秀しゆ用よう也やおお形かたちくく三さん日にち松しょう藤とう曲まが

掃はきりりせせあありり小こ屋や高たか内うちととううらららられ

これと比季用十七歳なり

大権現浄威おほごんげんじやういののああままりりりり季用きようがが高たか名な

とと冬ふゆ后ご秀しゆ者ものありり浄物じやうぶつぶぶりりありり秀しゆ者もの

藏くらとと石いし垣かき山やまののままのの

大杉現りけりしより
 文禄元年船解五征伐のとき清
 小姓とありて肥前名護屋より侍
 長五郎関原清陣のとき季用歩
 奥別陣のとき忠義とありて
 同り秀吉よりまゝ先も又もと
 けりし秀吉松本にて黒の馬と
 秀吉が邸に白坂侍苑高名と季用一
 けりし秀吉よりまゝ先も又もと
 けりし秀吉よりまゝ先も又もと

引の段とありて清旗下り居
 還御のとき伏見よりおわく
 三千石餘をくらひ
 同十七年八月六日駿河よりおわく
 四十歳にて死す 是名成表

用可

五郎 縫居助を別漢松生れ
 同五井若り
 越前中納言秀康卿よりつゝ

子息直忠乃と記しりて
高政と形を

元和元年のしつと連を別
濱松よりおわく

旨徳院殿より拜指しをそまら

父秀用やうらに大坂陣より

信守は五月七日沙合戦の時

と主寺よりおわく言ふ

中陣のら 命とつぬり

秀用よりりて足輕乃との五十人
をあつた

同一年正月 上使をうけし海り

越前よりしつと海りふとびて

相州大磯より落馬し二月十日

り死す四十一 法名道安

用義

秀九郎 生國下総

寛永三年十月十一日と十一

赤心く死に 法名淨鉄

用将

長九郎 生國武苑

寛永八年 祖父考用が家督と
しさを別井岩よあわくみふる
餘の地と津頃と

用行

八苦湯 のら五石と号と 生國神あ
武別りうり位と

寛永九年七月六日 津歩りの頭と
なれ

同年十二月 布衣と恙とる事を
ゆり

同十年 女知を別 養原二子五百石
乃がの五百石とくり 婦り地二子石と録と

用一

縫角助

生國同あ

を江気賀り

うづり信也

命とつゆりく 本坂越此実と

貞用

勘助

のら登助と号

幸別り

う海邊井若此由金指り信也

寛永八年与力五騎三程五十一人

同九年十二月市衣と总正り事と
梅ふう丸

家紋

康角乃丸



某 ま

近藤 えんどう

九十郎 うま
生家 うま

尾別 びべつ 志智郡 しち 履糸 りづ の里 り

重郷 しげ

海 うみ 五 ご 在 あ 爲 ゐ
生 なま 國 くに 同 どう 所 ところ
美 み 流 りゅう の の 方 かた 色 いろ

郡男天村り信長
織田信長の家臣間見仙千代り信長
天正六年四月二十一日江別安去
おわくおと

重勝

田部右衛門 信長
細ののり信より間見仙千代り信長
戦度戦四あり

信長
鉄炮りあり
二十六年
先手
前乃水庄り
城部

天正十一年小田原の陣中よりおろしく
秀正病死をうらみていしく我志せむ
うけす二男美能守とらりしるべし
おろりこれと記美能お庄より
おろりしるべし越前よりうらしく美能守
おろりしるべし

寛永二年四月二日お庄秀正を
嫡子たるお庄秀正に越前のおと封じ
お庄よりしるべし同朱下のおらとら
おらと

お庄よりしるべし
同九年正月二十四日城川におお
おらと

正成

七島右衛門のら信濃守を
越前のお庄よりしるべし
美川お庄秀正が七男なりしるべし
お庄よりしるべし

東播越後の國よりまゝり大坂の城あり
の丸よりおあぐ

東照大権現よりお湯一をそまつる時
守備が先祖のものとせし海より手
勝云く一をそまつる一をそまつる
一尾洲の住人九十郎といふもの
孫也切のれら記より疏とありあり
流浪せしゆり下りたり一奇事は
そんとはつはつるまゝのく 仰り

いしくは祖父九十郎尾洲老智
郡も圃此城を海より忠義といふ
海よりたあま高家徳才のものなり
ゆ子あはれありしつるまゝの
教命とありゆりはよらそまつる
五年此喜正成十三歳山一と榊原
武部を物原政が奏者とありあり
大権現より湯一をそまつる今年小

山ありびよ関原の陣は徳を

幼年より

大権現の御膳番とつゝ

享長八年此春正成十六歳あり

後五位下り叙せし信濃守に任

回九年四月五日正成

大権現の命よりりりて父主掃が四邑

一万石を領するに越後のあま

濃別にあわく五千石信別川

中流にあわくみふるに

地を領す

大坂あきの御陣より永井左衛門大進

御掃が継やなりと侍を

元和三年九月五日

信濃院殿より四領一万石の御米

御海

同四年六月二十二日御入りあわ

死に歳三十一

皇女

織部 生駒驛河

元和四年十二月十二日 皇女七歳の
とれ 古井大炊頭利勝が奏者として
白河院殿より 珠湯一そそまつる
父正成が給知一石をれうら 湯川よる
る 堀尾氏よりうら 海りり川中嶋
千石とて 皇女よら 海りり川

中嶋をわらめく 同皇伊奈郡よりつる

同年あまの山 浄堀普信の役とつる

河部海 中守正次がなりりる

同九年 寛永二年 御入洛乃中記

皇女江戸入りありて 浄服指御門乃

書とほしむ

うら 日光山 御社泰乃とれ 浄田

浄正の御利正とて 皇女うけを海りりて

同取れ 浄書とほしむ

日十一年 御入洛乃節 板倉内膳正
手島が紐とありて 供をた

家の紋 藤の丸

某

近藤

源流

生國冬河

東照大権現より清之りそまらふ

正成

権左衛門

生國冬河

白瀧院殿

將軍家より侍りてまゐる

正利まさとし

次郎八 生國むくに茂茂しげしげ

將軍家より侍りてまゐる

音の紋 ねのいざな と春の丸

近藤

●吉成

久田

東照大指現より
元龜三年幸別三方原合戦の
所馬乃前よりおろしく討死

右忠

久内

生國卷河

大指現

右徳院殿

將軍家入り侍之了そまらふ

右次

相芳清

生國相模

右徳院殿

將軍家入り侍之了そまらふ

寛永八年二條清城の番と侍とを

同年十一月十九日二條入りおあそび死

と歳二十五 法名唯知

右正

右馬助

武則江戶入り生員

家の級

とざり
下孫の丸

近藤

某

助右衛門

生國泰江

廣忠卿

りは子

正勝

すけのぶ

助右衛門

生國同弟

東照大権現

台徳院殿より勅^{えい}仕^じ一^{いち}巻^{まき}

正^ま全^{ぜん}

助右衛門 生國回前

お屏家より信^{のぶ}之^の一^{いち}巻^{まき}

家の紋 ^{かみり}と巻の丸

● 勝後くわご

近藤

助右衛門

生玉糸なまたまいと

廣忠ひろただ

一ひと行ゆき子こ

勝久かつひさ

助右衛門

生田なま田た回まわり

東照大権現よりけりまらるる

勝利こうし

吉原藩

生國回り

本多作左衛門守右衛門たけはらさくざゑもんしうゑもんと名なり

寛永十六年四月二十三日かんゑいじゅうろくねんしがつにじゅうさんにちに

はな宗仁はなむねに

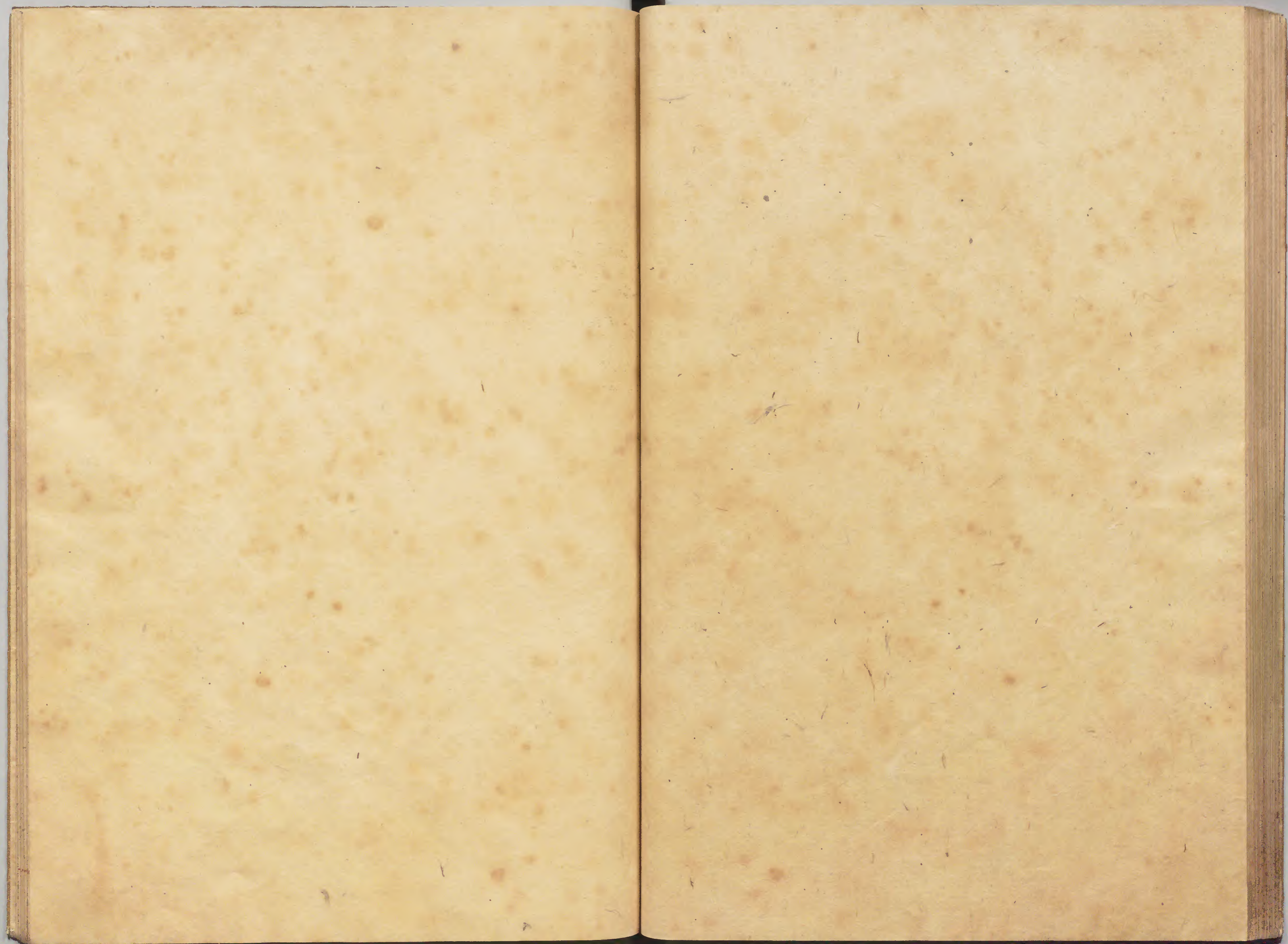
勝重かつしげ

甲斐右衛門

台徳院殿

おんまゐりよりけりまらるる

家の紋 下巻の丸さげまきのまる



近藤

● 秀登 いであき

左馬頭

生國友 いぬくにとも

廣忠卿 ひろちか 行子

秀勝 いであかつ

左馬頭

生玉 いぬたま 同新

東照大権現

台榭院殿より修之とてまうが

寛永四年七月二十五歳よりと死す

法名道林どうりん

秀原ひで

右郎左衛門

生國氏い

台榭院殿

將軍家より修之とてまうが

家の紋

下右ひかりの丸まる



某

越後えちご

生田なま田た方かた

某

了金りょうきん 生田なま桑くわ江え
清原きよはら君きみ乃の清きよ子こ

近友ちかとも

廣忠卿の侍と記痛く思ふ

秀正

半若湯 生國回

東照大指現り侍りしとまらる共

は秀正と申多と野々あつちを

台徳院殿乃御記 仰をうめく

河忠長卿り侍り

寛永三年歳七十のりく

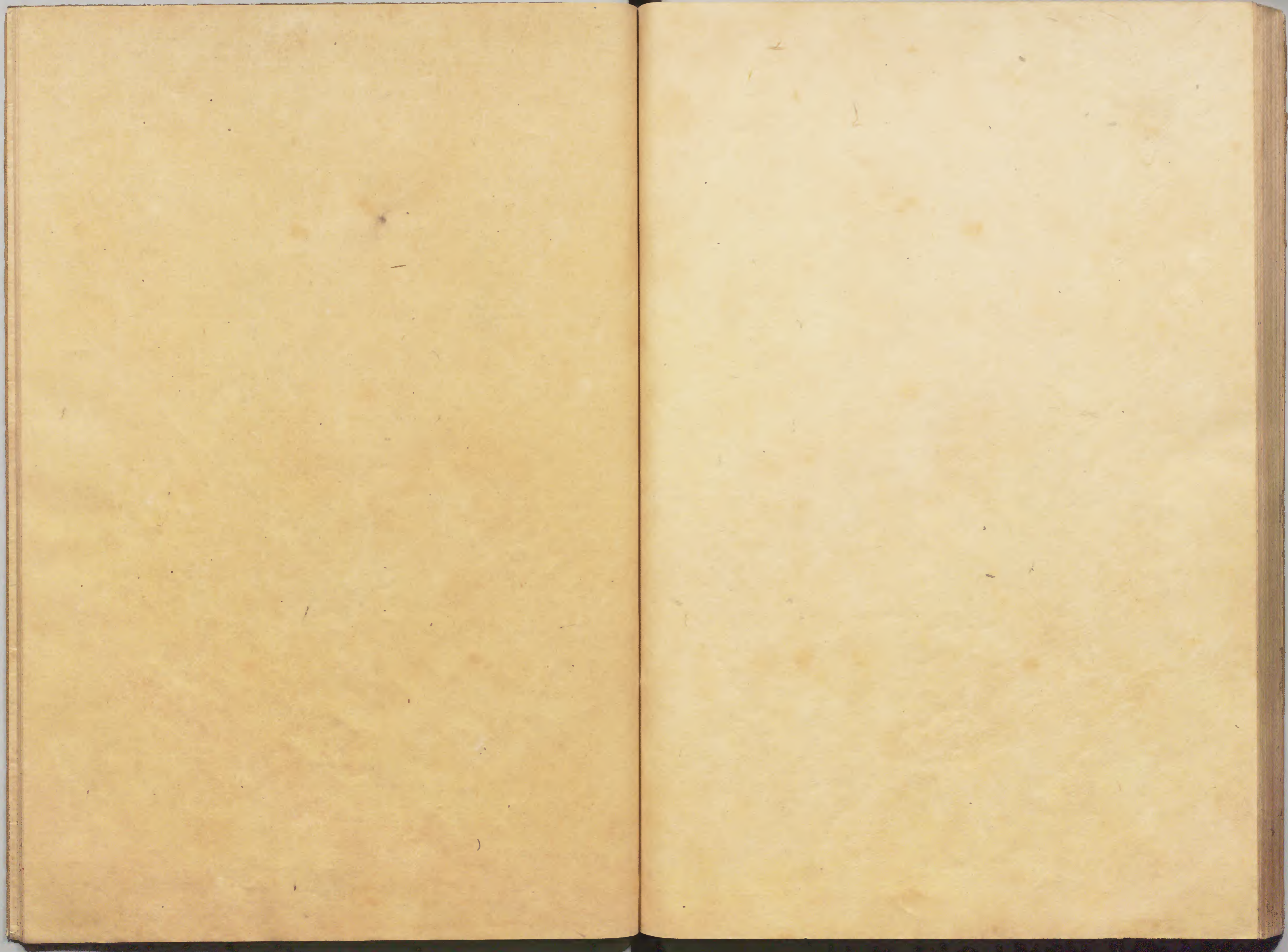
登正

与若湯 生國孝

台徳院殿

將軍家り侍りしとまらる

家の紋 下孫の丸



秀勝 ひでかつ

右邊門

伊賀

生國同好

某 たが

治部卿 しよぶ

伊賀 いが

生國相模 なまが

小條氏 こじょう

入法 にっぽう

近藤 えんどう

東照大権現

台徳院殿より修了了りまらる

寛永八年二月十二日

死に 法名 隆順

正勝

曲集

生園式苑

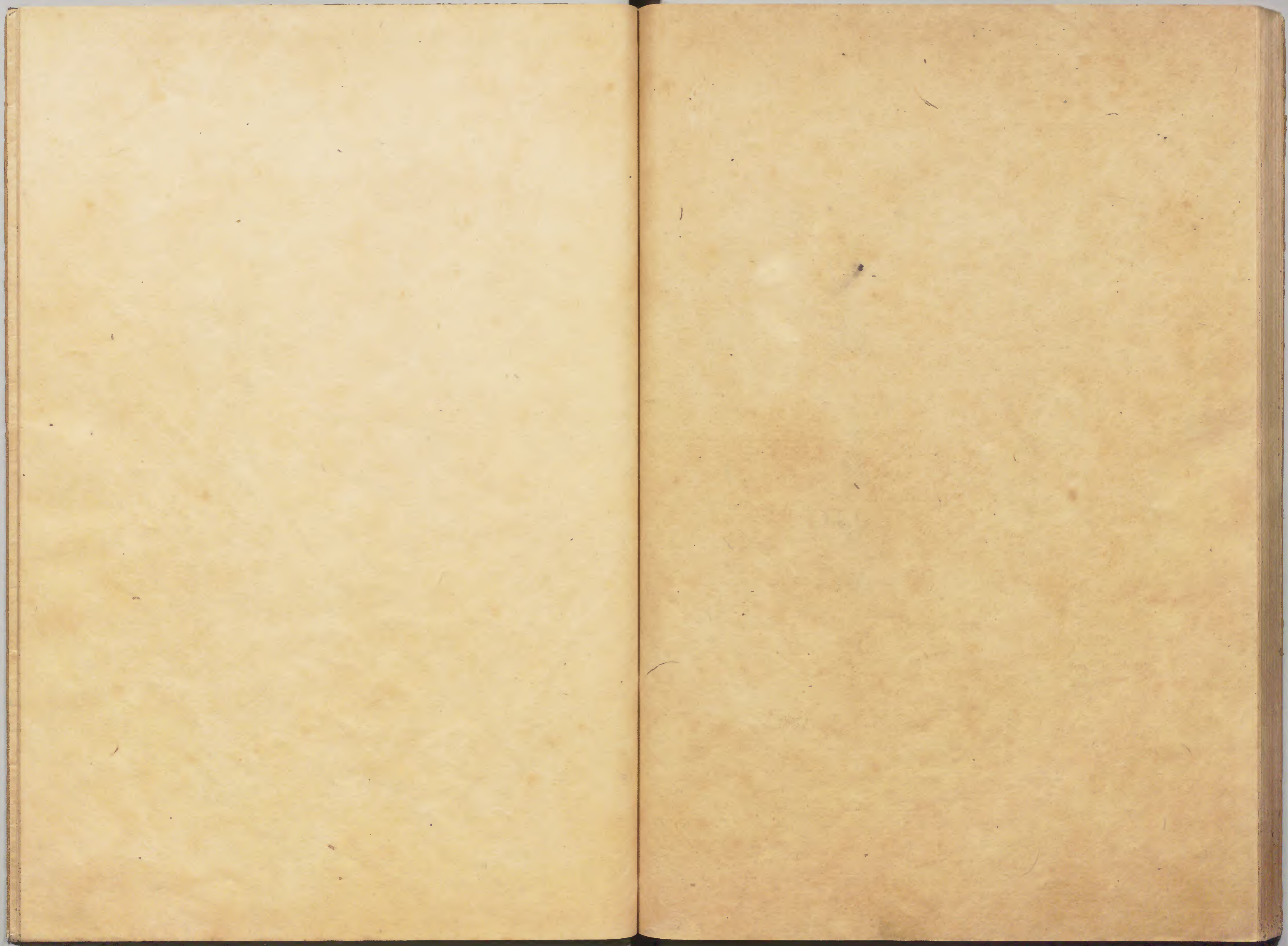
台徳院殿

將軍家より修了了りまらる

家の紋

遠有羽

相塔



近藤 えだう

某

惣右郎 そうごろう 生田 なうた 春河 はるがわ

東照大権現より法之了了そまづり大
清 きよ 毒 どく と了 りょう 心 こころ

某

惣太郎

生田山城なまのしろ

台徳院殿入り侍之了とてまづり大津

毒と侍と母と

寛永元年二十一歳よりして死す

正信まさのぶ

五郎助

將軍家入り侍之在り寛永十六年

より大津毒とつとむ

家の紋

軍配圖かたむすび

